

■はじめに

新年度も 2 か月が過ぎ、学校も少し落ち着き、軌道に乗ってきたことと思います。一年が漫然と過ぎていくことのないよう、今一度、教職員の意識を引き締め、学校経営をよろしく願います。

■「子どもたちのために」という強い思い

先日、東京の開成中学校から「修学旅行で唐招提寺御影堂の修理の様子を見学したい。」という依頼がありました。この時期は開山忌に当たり、御影堂が公開され、安置されている国宝の鑑真和上坐像、東山魁夷画伯の襖絵、鑑真和上坐像厨子扉絵などを見ることができますが、御影堂は現在、平成の大修理が行われており、入ることができません。普通ならば「せっかくの修学旅行なのに、修理中で残念だったね。」となってしまうところだと思います。しかし、開成中学校の担当の先生は、



「奈良への修学旅行を単なる文化財の見学で終わらせるのではなく、保存や発掘の様子を体感させ、自分たちが触れている文化財が日々多くの人に守られてきたものだということを感じてほしい。」

との思いから修理を見学させてほしいと依頼されたとのことでした。

私はこの話を聞いて、十数年前まで外務省が行っていた、外交官に対する事前研修で関西地方の世界遺産を訪れ、日本の文化や歴史を学んでいたという話を思い出しました。海外では自国の文化や歴史を語るができない人物は尊敬されず、信用を得ることができないため、このような研修を行っていたそうです。同様に、開成中学校でも世界で活躍できる人材を育成するために、自国の文化を誇りに思い、守り引き継いでいる現場を見学させたいと考えられたのではないかと思います。先生方の子どもたちのために教材を見つけよう、という強い思いが教育を深いものにしていくのだらうと思います。

■心に残る世界遺産学習

本市でも同じような思いで始めた取組があります。それが世界遺産学習です。世界遺産学習は、平成 12 年に副読本を発行し、平成 13 年に小学 5 年生の現地学習を実施したことから始まりました。今ある形へと変わっていったのは、平成 19 年度に「新しい世界遺産学習構築のための検討委員会」を設置してからでした。世界遺産学習が始まって約 20 年、世界遺産学習の在り方を問い直してから 10 年が過ぎましたが、その間印象に残っている取組が 3 つあります。

① 「自分のまちの宝物」をテーマとするフォトストーリー

フォトストーリーとは、テーマに基づいて取材を行い、5枚から10枚程度の写真をスライドショーにしてナレーションを付け、1分から1分半程度にまとめる表現方法のことです。このフォトストーリーを使った教材は、10年ほど前に当時椿井小学校に勤務されていた小島先生が開発し、その後ユネスコ協会が「私のまちのたからものコンテスト」として全国規模の募集を行うようになりました。椿井小学校では、学校の隣にある創業400年以上の墨工房「古梅園（こばいえん）」の墨作りをテーマとし、子どもたちの熱心な議論を経て、作品を作り上げました。

② 聖武天皇の文字から学ぶ書写の取組

奈良国立博物館の看板の文字が聖武天皇の『雑集』という文書から文字を拾って作られたことをヒントに開発された書写の授業です。この授業を行ったのは、当時登美ヶ丘小学校に勤務されていた辻倉先生です。子どもたちは光明皇后や鑑真和上の文字と比較する授業を受け、当時の奈良国立博物館学芸部長の西山厚先生から聖武天皇の人柄について話を聞き、聖武天皇の文字から人柄やイメージを想像しました。その後、子どもたちは『雑集』の中から一文字を選び、それを手本に書写を行いました。最後に習字作品を団扇に貼り、作品を仕上げました。



③ 「新南都八景」の取組

「新南都八景」は、済美小学校で、当時勤務されていた大西先生が中心になって学年で取り組んだ授業です。

子どもたちは江戸時代に観光地として有名だった「南都八景」が、現在では失われているものがあることを知り、その原因を考え、大切な景観を未来に伝えていくためには何が必要かを話し合いました。その結果、子どもたちは「みんなが無関心になること」に原因があると考え、自分たちが無関心にならないために身近にある文化遺産の発見に取り組みました。

この取組では800人以上の大人を対象にアンケート調査を行い、未来に残したい風景を選定していきました。自分たちが撮ってきた写真を前に、「なぜこの風景を未来に残したいのか」という理由とその良さをプレゼンし、議論を交わしました。最後に皆で投票を行い、子どもたちは新南都八景として、次の8つの風景を選びました。

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|------------|
| ①佐保川の桜並木 | ②若草山の山焼き | ③奈良公園の燈花会 | ④水室神社のしだれ桜 |
| ⑤奈良公園の紅葉 | ⑥二月堂のお水取り | ⑦五重塔の青空 | ⑧浮見堂の夜 |

これらの実践は、先生方が「どうしたら奈良を好きになってもらえるか。奈良の良さを実感し、自分たちの誇りにしていくことができるのか。」ということを考え、普段何気なく目にしているものから独自に教材を作り上げたものです。このような先生に出会えた子どもたちは幸せだと思いますし、これからも奈良の先生はそうあってほしいと思います。

■「ゆめの国 燃ゆべきものの 燃えぬ国 木の校倉の とはに立つ国」

これまで世界遺産学習のヒントになればと校長会で話をしてきた中の一つに森鷗外の話があります。奈良国立博物館の東側に「鷗外の門」と呼ばれる門と石碑があります。鷗外は大正6年から大正11年まで帝室博物館総長兼図書頭（ずしょのかみ）に就任し、「正倉院の開封の立会」という職務を行うため、11月に20日間ほど奈良に滞在していました。その時の官舎の門が「鷗外の門」として保存されています。鷗外は公務の合間に奈良の各地を回り、その印象や感想を短歌に書き留め、『奈良五十首』として発表しています。

その中で特に私の心に残っているのは「ゆめの国 燃ゆべきものの 燃えぬ国 木の校倉の とはに立つ国」という歌です。「焼けて当たり前の木造建築物が、天平の昔から建っている。燃えずに残されている。まさにこの国は夢の国である。」と正倉院を詠んだものです。鷗外は自分の足で奈良を巡ることで、千年の時を超えて大切に守られ受け継がれていることの素晴らしさを改めて実感したのだと思います。こうしたことが鷗外にとって奈良はまさに「夢の国」であり、これからもそうあり続けてほしいという願いを込めてこの歌を詠んだのだと思います。

鷗外が奈良を訪れて100年が経ちました。鷗外が見た「夢の国・奈良」を守り、未来に伝えていくのは、私たちであり、子どもたちです。

■奈良で学んだことを誇らしげに語れる子に

遺産などの素晴らしい本物が残る奈良で先生方がアンテナを高くして、奈良の良さを子どもたちが実感できるような授業開発をしてほしいと思います。そのため、校長先生が先頭に立ち、自分の言葉で奈良の良さを語りながら、身近にある宝物を教材化していけるよう担任の先生方に声かけをしてほしいと思います。

今年は奈良の文化財が世界遺産登録をされて20周年にあたります。奈良で生まれ育ち、奈良で学んでいる子どもたちには、奈良を誇りに思い、奈良の良さをしっかりと自分の言葉で語るようになることがほしいと思います。それが自らの中に自分の根っことなるアイデンティティを確立することになり、多文化共生社会の中で相手を尊重し、胸を張って生きていくことにもつながると考えます。そして、こうした素養を持つことが、国際社会に通用する大人になることなのです。どうぞよろしくお願いいたします。

奈良の良さをしっかり語る子に
教員自ら奈良の良さを知り、
本物に触れ、自らの言葉で
子どもたちに伝えていく
授業という実践を通して
奈良で学んだことを
誇らしげに語れる教育を